

加温ハウスモモ栽培における着色促進技術

遮光 2 重袋を加温ハウス栽培のモモに掛けることにより、着色が向上し、裂果の発生が抑えられる。除袋は収穫前 12 日程度が適当である。また、糖度の低下を軽減するため、内袋が撥水加工のものをを使ったほうが良い。

農業研究センター 球磨農業研究所(担当者：岩谷 章生)

研究のねらい

モモの加温ハウス栽培ではビニール被覆による光線量の低下、枝梢の過繁茂により、無袋栽培でも着色が不良となる傾向がある。そこで、着色しにくい品種に対し着色促進効果のある遮光袋を用いて、着色の向上を図る。また、適正な除袋時期を解明する。

研究の成果

1. 収穫 12 日前より前に除袋すると、無袋に比べ着色が向上した(図 1)。
2. 裂果の発生は遮光 2 重袋を使用することによりほぼ抑えられた(図 2)。「加納岩白桃」の無袋果実は試験期間を通じて、ほぼ半数に裂果が発生した。
3. 糖度は遮光袋を掛けることにより、低下した。内袋が撥水処理の袋を収穫 12 日前より前に除袋することにより、糖度の低下が抑えられた(図 3)。

以上の結果から、遮光 2 重袋を加温ハウス栽培のモモに処理することにより、着色が向上し、裂果の発生を抑えることができる。除袋は収穫前 12 日前程度が適当である。糖度は処理により低下したが、内袋が撥水加工の袋を使用することにより、軽減できる。

普及上の留意点

1. シルバーマルチは新しいものを全面に敷設し、樹冠下に約 20%程度の日光がさしこむように適度な夏季せん定を行う。
2. 果実に日光が直接当たると、裂果の発生を助長するため、適度な側枝密度を保つ。
3. 遮光 2 重袋は「加納岩白桃」、「八幡白鳳」など着色しにくく、裂果の発生が多い品種に対して処理する。

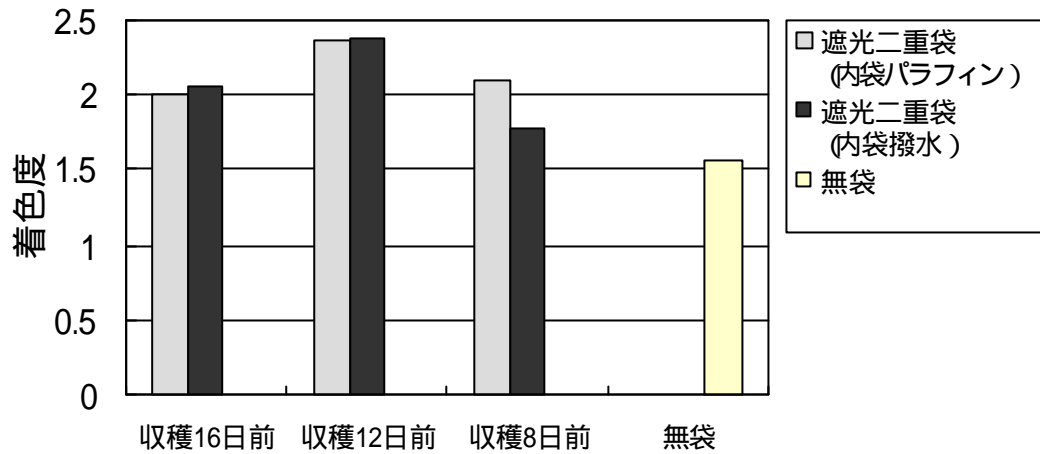


図1 遮光袋の種類と除袋時期による着色の差

* 「加納岩白桃」を供試。収穫日は満開後 90 日とした。

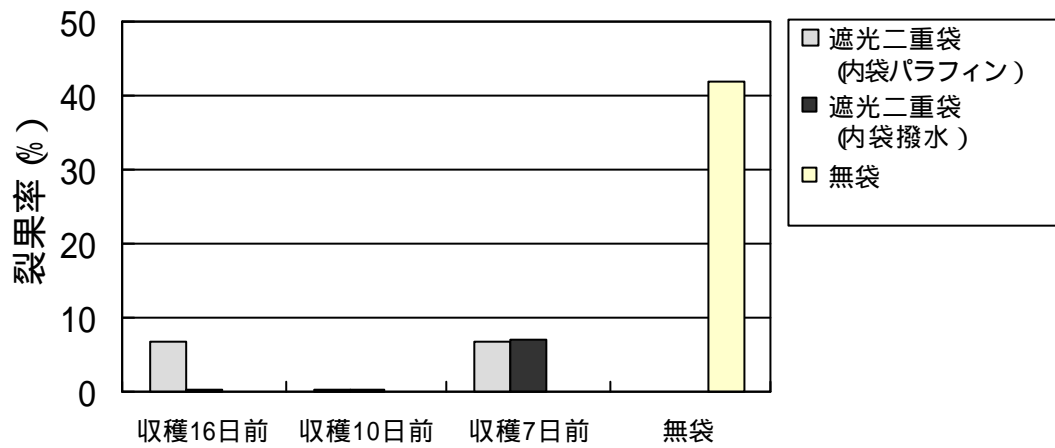


図2 遮光袋の種類、除袋時期による裂果率の差

* 「加納岩白桃」を供試。収穫日は満開後 90 日とした。

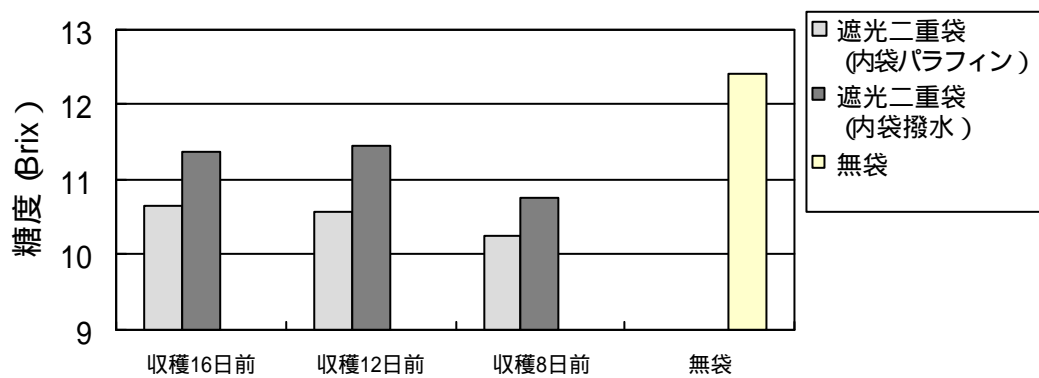


図3 遮光袋の種類、除袋時期による糖度の差

* 「加納岩白桃」を供試。収穫日は満開後 90 日とした。